

5 4. 「挑戦する力」

2014.3.1 遠藤清賢

子どもが成長するにしたがって、出来ること出来ないことがはっきりと区別されるようになります。得意なこと、苦手なことがはっきりしてきます。特に苦手なことを、何とか得意になるようにしてあげたいと願うのは親として当たり前のことです。食事などの好き嫌いは親としての嗜好がそのまま伝わりますので、親御さんの方の努力が必要です。お片付けや身の回りの環境を整えることができるようになって欲しいと思うなら、親御さんの生活の状況がそのまま伝わりますのでこれも親御さんの努力が必要です。子ども達の言葉づかい、日常生活の動作、習慣的な食事の作法、挨拶、生活動作の順番は家族の生活が大きく影響します。子どもと一緒に楽しみながらお手本を示してあげるのが理想的だと思います。小学校に進むと、運動や勉強など苦手なことが増えます。とくに勉強については、どの科目も良い成績になるようにしっかり努力して欲しいと私たち親は強く願うのだと思います。そして苦手なことを克服するように努力することが最優先であると考えられるかもしれません。

ここで確認して頂きたいと思います。全てのことを完璧にできる人はいないのです。不完全であることは努力することの尊さを体験できます。基本的に子どもは苦手なことを治すことはできないのです。ただし、苦手なことに挑戦することはできます。できることよりも、あきらめないで挑戦する気持ちを持つことを大切にしたいと思います。この気持ちができるまで忍耐強く待つことが親の務めなのです。ですから苦手なことがあっても見守ってあげていれば良いと思うのです。苦手なことを克服する気持ち、挑戦する気持ち、その力はどこから湧き上がってくるのかと言えば、親御さんからの豊かな愛情から湧き上がってくるのです。この愛情によって子どもが自己肯定感を獲得しているか、獲得していないかが問題なのです。この気持ちは自分という人間に自信を持っているのかどうか、生まれてきたことを良かったと思えるのかどうか、今を喜んで生きているし、将来もそうありたいという気持ち、心です。この自己肯定感のある子は、冒険心が旺盛です。大きくなって自分の足りない部分を克服したいと思った時、挑戦できるのです。自己肯定感の無い子は、初めからあきらめてしまいます。自分には出来ないと決め付け挑戦しないのです。自信が無いのです。

子ども時代には、苦手を克服のために努力させることより、自己肯定感を養うことの方が大切だと思います。自己肯定感を養うために親としてやらなければならないことは、生まれてから愛情を掛けるということです。それを継続することだと思います。具体的には、乳児期ではスキンシップ、抱きしめる、優しい声掛け、適時のオムツ交換、適時の食事の用意、等です。言葉を獲得する幼児期にはスキンシップ、抱きしめる、優しい声掛け、子どもの声を聞く、共感（楽しい気持ち、悲しい気持ち、きれい、感情や感覚等）、手作りの食事、一緒に遊びの時間、等が大切です。子どもの誕生を喜び、子どもを授かったことを感謝する心を行動で伝えることが大切です。保育園は家族、親としての働きをさらに強め、子ども達の自己肯定感の獲得を支える働きをする場所です。自己肯定感とは子どもたちが成長する過程において遭遇する困難を克服するための大きな力になり、自立心を獲得できるのです。ですから、苦手なことは後回しにしても良いのです。それよりも育てなければならない大切なことがあるのだということを確認して頂きたいと思います。



《大根もちの作り方》 材料と分量(5個分)

白玉粉 50g、上新粉 50g
大根 100g、長ネギ 20g
ゆで桜えび 10g、
砂糖 大さじ1弱
しょうゆ 大さじ1/2

作り方

1. 大根は輪にスライスしてから千切、長ネギは小口切りにする。
2. 大根と長ネギを鍋で炒めてしんなりさせる。
3. いためた大根、長ネギにゆで桜えび、白玉粉、上新粉を入れ混ぜ水を加えて耳たぶ位の固さにこねる。
4. 小判形にまとめ熱湯でゆでる。
5. 別の鍋に砂糖、しょうゆを入れて少し煮詰める
6. ゆで上がった餅にからめ、フライパンで焼き目をつける

